

兵庫県立考古博物館の利用者の特徴について

—開館4ヶ月の傾向—

高瀬 一 嘉

1. はじめに

兵庫県立考古博物館（以下当館）は、兵庫県加古郡播磨町に史跡大中遺跡に隣接して平成19年10月13日（土）に開館した。当館の入館者の特徴を把握することによって今後の博物館活動に資するために入館者情報を分析することとした。開館から4カ月あまりが経過した平成20年2月末の時点でとりまとめを行った。



写真1 博物館外観

2. 基本的な情報

1) 位置

兵庫県のほぼ中心部にあたる加古郡播磨町に立地する。神戸市から西に約30kmに位置する播磨町は、人口33,511人（平成19年）の小さな町である。東に人口30万人弱の明石市、西に人口27万人弱の加古川市にはさまれた阪神間のベッドタウンである。（第1図）

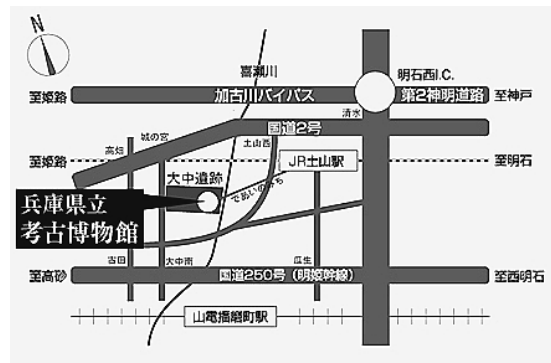


第1図 博物館の位置(1)

2) アクセス

JR在来線を利用する場合は、神戸線「土山駅」で下車、遊歩道「であいのみち」を徒歩で約15分である。私鉄を利用する場合は、山陽電車「播磨町駅」で下車、喜瀬川に沿って徒歩で約25分である。

自動車で来館する場合は、加古川バイパス・第2神明道路の明石西I.C.から約3kmである。渋滞がなければI.C.から約10分で到着する。（第2図）



第2図 博物館の位置(2)

3) 駐車場

当館は史跡「大中遺跡」に隣接して建設されたため敷地内に用地が確保できず、来館者用の駐車場は整備していない。当館の周辺には播磨町営の

駐車場が2カ所あり普通車 119 台分のスペースが確保されている。有料で、1 回 200 円である。当館利用の入館者への特別な措置（観覧料の割引等）はしていない。（第3図）

4）休館日と開館時間

基本的に月曜日が休館日である。月曜日が休日にあたるときは開館し、翌平日を休館日とする。ただし、4 月第3 週～5 月第2 週の期間と夏休み期間（小・中学校の）は無休である。年末年始は12 月31 日と1 月1 日を休館とする。

開館時間は季節とエリアによって違う。まず、無料ゾーンが冬期（10 月～3 月）は午前 9 時から午後 5 時まで。有料ゾーンが冬期は午前 9 時 30 分から午後 5 時までとなる。夏期（4 月～9 月）は開館時間が1 時間延長され午後 6 時までとなる。ただし有料ゾーンへの入館は閉館時刻の 30 分前までである。



第3図 博物館の位置(3)

5）料金

前項で述べたが、館内は無料ゾーンと有料ゾーンとに分かれている。有料ゾーンは体験展示室「発掘ひろば」、テーマ展示室、特別展示室の3室である。その他のエリアは無料ゾーンとなる。

料金は特別展開催期間中とそれ以外の期間で違いがある。実施した2 回の特別展期間中の観覧料は大人 500 円、高・大学生 400 円、小・中学生 250 円である。それ以外の期間、いわゆる常設展のみの期間の観覧料は大人 200 円、高・大学生 150 円、小・中学生 100 円である。特別展期間中は一律料金となり、常設展のみの観覧（たとえば大人 200 円）に対応はしていない。

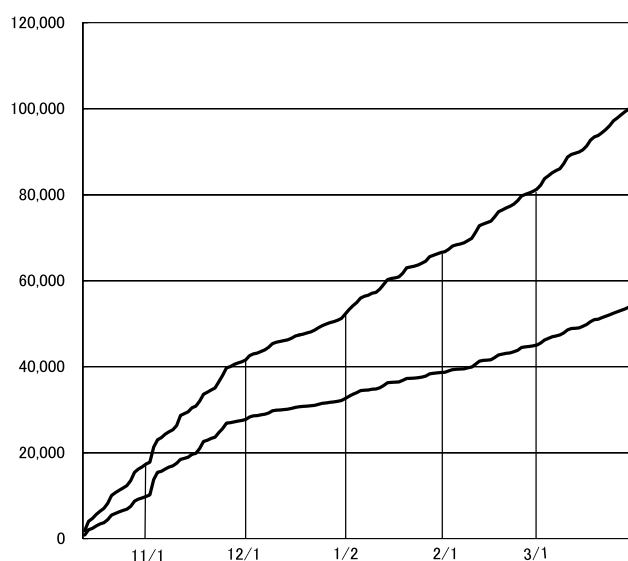
なお、兵庫県は県内に在住、在学の小・中学生全員に「ココロンカード」という優待券を発行しており、これを提示すれば無料で観覧することができる。

6）入館者のカウント

当館では2カ所の出入口にセンサーを設置、自動で人数（入館と退館、大人と子ども）を記録している。

いっぽう、発券カウンターでは発券分類に応じて一般、高・大学生、小・中学生、高齢者、幼児の人数を記録している。ここでは、センサーでの人数を「入館者数」、発券カウンターでの人数を「観覧者数」と規定する。入館者数は無料ゾーンを含めた人数、観覧者数はそのうち有料ゾーンを利用した人数となる。

入館料金を徴収していないため、幼児（6 歳以下）の人数を把握できないこと



第4図 入館者数と観覧者数の推移

に気づいたのは、開館から2カ月以上経過した12月であった。12月24日以降、発券カウンターにて幼児の観覧者数をカウントしデータに加えている。

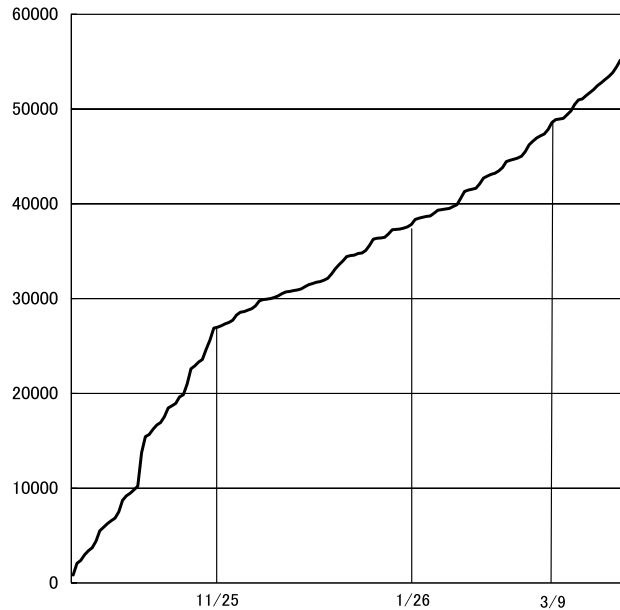
3. 利用者の分析について

1) 入館者数と観覧者数の推移

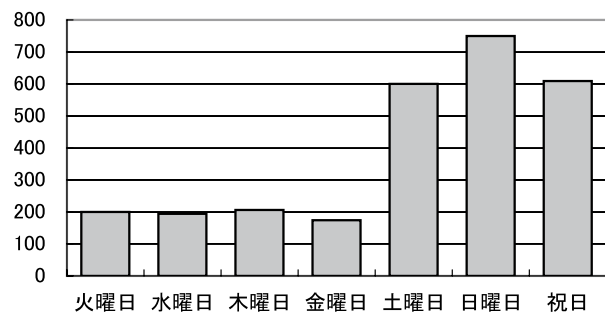
10月13日の開館以来、2月29日までの4ヶ月半、121日間の入館者は81,316人、観覧者数は45,023人を数える。月別入館者数は10月－16,722、11月－24,441、12月－10,055、1月－15,342、2月－14,756である。月別観覧者数は10月－9,466、11月－18,021、12月－4,652、1月－6,526、2月－6,358である。入館者と観覧者の傾向に大きな違いは見られない。当館に入館したうち約55%が有料ゾーンを利用していることになる。(第4図)

利用者の推移のグラフからは、11月25日の開館記念展が終了した時点で入館者のペースが落ちている。(第5図) 具体的に見てみると観覧者ベースで開館記念展期間中(38日間)は1日あたり707名であったものが、その後の30日間(12月30日まで)では175人となっている。

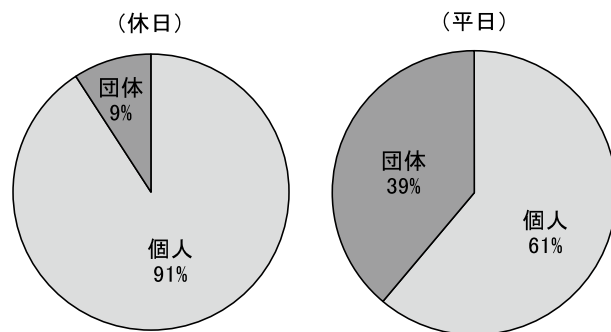
月別の傾向としては、10月から11月は盛況、12月は伸び悩み、1月から3月にかけては順調に回復。とみることができる。(1/26～3/9は開館記念展Ⅱ開催期間)



第5図 観覧者数の推移



第6図 曜日ごとの平均観覧者数



第7図 団体比率

2) 曜日ごとの観覧者数について

一般的に休日の利用者数は平日にくらべて多いものであるが、当館の入館者傾向もその例にもれない。それを示すものが第6図である。曜日ごとに1日あたりの観覧者数をグラフにしたものである。平日は平均200人前後であるが、休日（土曜日を入れる）には600人を越え、平日の約3倍となる。平日（火曜日～金曜日）については、曜日ごとに特に顕著な差は認められないが、強いて言えば金曜日が1割程度他の曜日より少ない。休日については土曜日より日曜日のほうが約140人多い。祝日の観覧者数は土曜日並みである。

以下でさらに細かく分析を行う。

3) 観覧者の構成について

①個人と団体

観覧者には個人と団体に分ける分類方法がある。この構成比率で平日と休日で著しい差が見られた。(第7図) 平日は団体比率が39%であるのに対し、休日はわずか9%である。これは、平日は学校を含む団体が、休日は個人のお客様が来館されていることを表している。

②観覧者の種別

観覧者を一般、高・大学生、小・中学生、高齢者、幼児の別に表したものが第8図である。一般が53%、高・大学生が2%、小・中学生が26%、高齢者が15%、幼児が4%となっている。これを県立歴史博物館と比較してみる。いちばん特徴的なことは小中学生の比率に大きな違いが認められるということである。県立歴史博物館が小中学生の比率が43%であるのに対し当館では26%である。

③曜日ごとの観覧者数の数と構成について

曜日ごとの観覧者の分析で、休日(土・日・祝)が平日の3倍程度の増加率を示すことはすでに述べた。観覧者の種別ではどうであろうか。第9図に示した。いずれも休日に急激な増加が読みとれる。ただし、高齢者のみは曜日による差はほとんどみられない。休館のあけた火曜日に増加傾向を示す。

次に、観覧者の種別では観覧者の構成に差があるのかどうかを示したものが第10図である。観覧者の構成を百分率で表した。

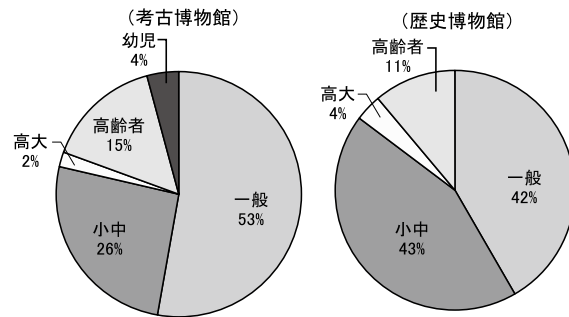
幼児と高齢者について興味深い傾向が見られた。幼児の比率が土曜日、日曜日、祝日などの休日に上がり、平日は高齢者の比率が高くなっている。高齢者はどちらかといえば週末を敬遠する傾向がある。ここでも休館日(月曜日)あけ、つまり火曜日の高齢者の来館者数の比率の高さは特筆される。

幼児の入館者数の増減を示すものに第11図を加えた。幼児数の統計をとりはじめた12月24日以降であるが、周期的に入館者数が跳ね上がっていることがよくわかる。入館者の多いのが週末(土・日曜日)である。

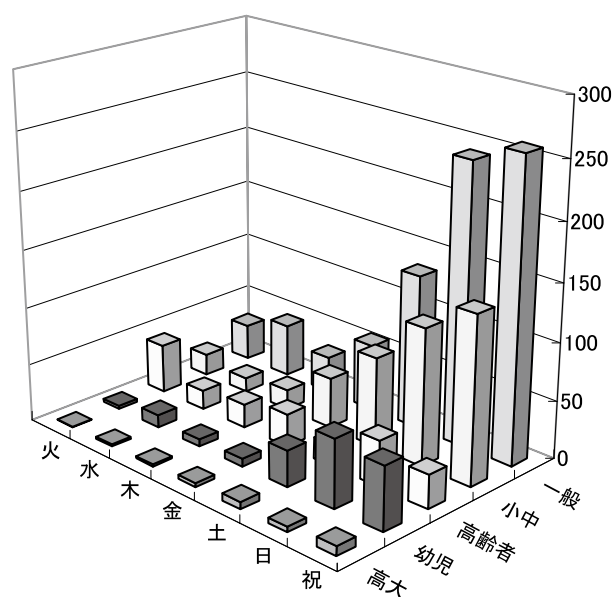
これらのグラフから、週末に幼児・小学生を伴った若い家族連れの来館者の姿が浮かび上がってくる。当館の来館者傾向の特徴である「週末・家族連れ」を、このグラフが明らかにしている。

この傾向を補強するグラフが第12図である。幼児、小中生、一般、高齢者について平日を1として休日の増加率を示した。いずれも増加しているが幼児、小中生、一般の増加率が著しい。

高齢者の性格付けは難しいが、館内で



第8図 観覧者の構成



第9図 曜日ごとの観覧者数

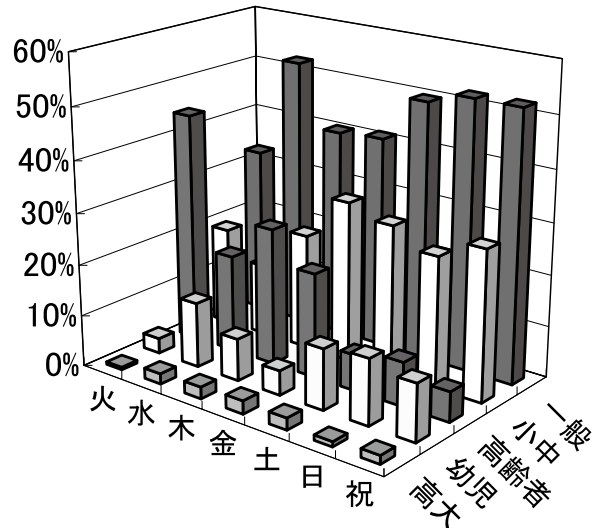
観察した限りでは平日は考古学愛好者、休日は家族を伴っての観覧という傾向があるように思われる。

4) 滞在時間について

2カ所の出入口に設けたセンサーカウンターは1時間ごとに入退館が記録されている。このうち、個人の利用者の多い休日のうち6日分のデータをグラフ化したのが第13図である。入館のピークは13時、退館のピークが15時である。

入館と退館にはもう一つのピークがある。入館に11時に山があり、12時に谷間がある。退館は12時に山が認められる。

このことから、次のことが読みとれる。午前中に入館者は滞在時間が短く、約1時間。午後からの入館者は滞在時間が長く、約2時間である。統計では表せていないが、感覚的に休日の午前は高齢者が多く、午後からは家族連れが多い。参加体験型メニューが多い当館の展示では子どもの滞在時間が長くなる傾向にあるようである。



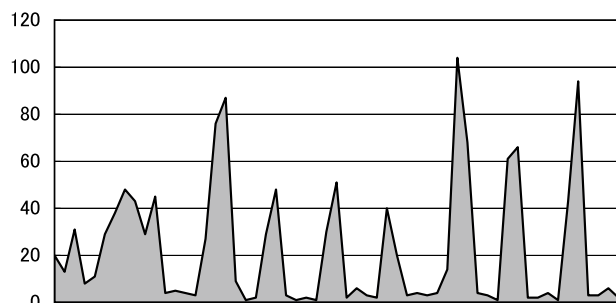
第10図 観覧者の構成（曜日ごと）

5) 観覧者数と特別展との関係について

博物館では特別展が観覧者増に大きく寄与すると言われている。当館は開館当初ということで分析は非常に難しいが、県立歴史博物館と比較して考えてみたい。

“冬枯れ”といわれる12月を基準に各月の増減を表した。（第14図）12月の観覧者を1としてグラフ化している。観覧者数が秋に多く12月～1月間に最も落ち込み、1～3月にかけて緩やかに増加するという全体の傾向は当館と県立歴史博物館に差はあまりみられない。しかし、グラフをみると県立歴史博物館では特別展が開催された11月には、12月の4倍の観覧者を記録している。いっぽう、当館では開館記念展「発掘・日本の原風景」を開催した11月の観覧者は12月の2.5倍程度にとどまっている。さらに開館記念展Ⅱ「おかえり故郷へ」を開催した2月から3月にかけては12月の1.5～2倍程度となっている。入館4カ月での分析であるが、当館は特別展に大きく依存しない入館者傾向を示していることが特徴といえる。

特別展開催期間中の観覧者の著しい伸びは喜ばしいことであろうか？逆に通常展示のみの期間の入館者の少なさを際立たせる一面を持つと言えるのではないだろうか。今後この数字の動向に注視していきたい。



第11図 幼児の観覧者数の推移

6) 観覧者数の限界値について

開館以来、特に休日ににぎわいをみせる

当館であるが、博物館として最も多かった日は開館記念展最終日（11月25日）の1,253人である。（無料開放日の4日分は除く）この数字は一見少ないように見えるが、体験型の展示が多い当館ではむしろこの数字は多いといえる。当日、体験展示のブースには行列ができ、子どもの観覧者が多いため、待ちきれないお客様も多かった。「誰もがいつでも」を標榜するならばむしろこれ以上の観覧者の増加は現在の当館の能力を越えた数字かも知れない。また、特別展示室の面積（204㎡）から考えると1日の限界値は1,200～1,300人あたりではないかと考える。

7) 今後の観覧者の獲得に向けて

ここまで4ヶ月間の分析をしてきたが、今後について少し考えてみたい。

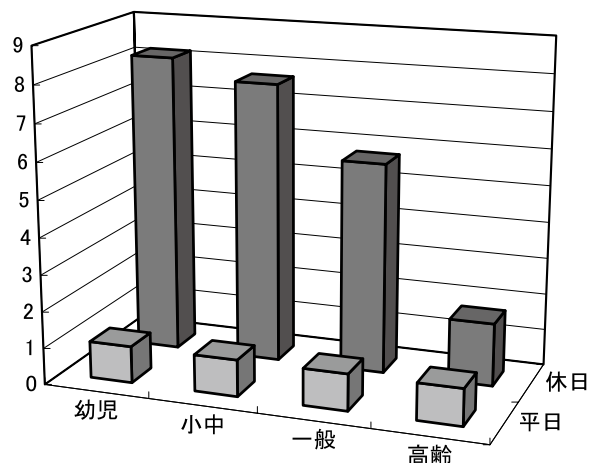
曜日ごとの分析から、平日と休日との差が顕著であることがわかった。その差を埋める鍵となるのは団体の利用である。このため学校や子供会などの地域のグループに向けて広報活動を行い校外学習あるいは地域活動の一環としての来館を促している。新年度からは学校団体などの予約が入っており、平日の観覧者が増加することが期待される。

観覧者の具体的なターゲットを、平日は考古学愛好者と学校などの団体、休日は親・子・孫の家族、さらに特別展開催期間中は専門家を含めた考古学ファンとし、それぞれのニーズに合った展示活動をすることが有効であると考え。

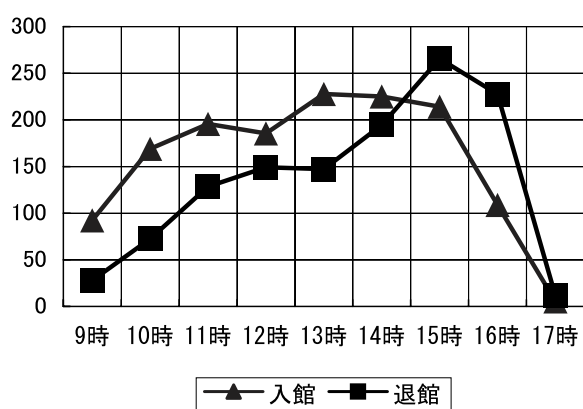
また、混雑が予想される休日については人が集まるイベントを午前中に開催するなどして、午後1時頃にピークを迎える観覧者数なるべく平坦化することを考えたい。これにより展示ゾーンの混雑を緩和しスムーズな観覧が行えることで観覧者の満足度を高めることになると思われる。

これまでの観覧者の分析から“子どもを連れた家族連れ”のイメージが強い。

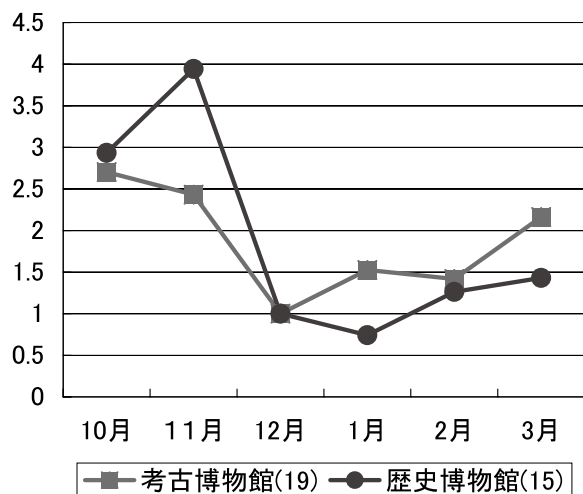
逆に、専門家、あるいは考古学ファンの数がやや少ないのではないか、いという印象がある。特別



第12図 平日と休日の増加比率数



第13図 入館者と退館者数



第14図 考古博物館と歴史博物館の観覧者数の比較

展での観覧者の伸びがやや鈍いというところに現れているのかもしれない。

“あそこは子どものための博物館か”と思われる、大人の考古学ファンに敬遠されている可能性がないだろうか？

これまでは広報活動において戦略的に“子ども”向けのPRを行ってきた。その結果、「家族で出かける～」「子どもと出かける～」「関西おでかけ～」など多数の情報誌等に掲載された。これが家族での来館を促し、来館者の増加に寄与したことは間違いない。それが「子どものための施設」として印象づけられたきらいはある。

しかし、当館は子どものため“だけ”の博物館ではない。利用者のバランスを考えた場合、これからは歴史ファンにもアピールしていくことが必要であるとする。同時に講座や講演会、考古学情報プラザでの情報提供を充実させるとともに、魅力的な展覧会を開催することこそが専門家を含めた考古学ファンの来館を増やす最も大きな要素であろう。

子どもたちを含む家族をターゲットにしようという目標は達成されつつある。次のターゲットは専門家を含めた歴史ファンと学校である。今後の当館の具体的な課題として、①特別展開催期間中の観覧者数の上積みと②平日の学校団体の増加の2点をあげておきたい。

4. おわりに

開館以来、当館の観覧者を観察してきたが、「お子様の数が多いな」ということを実感する。特に休日は家族での来館が多く、賑わいをみせる。館内では子どもたちの声が飛び交い、これまでの歴史系の博物館ではこれまであまり見られなかった風景が繰り広げられている。「子どもに受け入れられている」という当館の特徴は間違いのないところであろう。それは展示手法やイベントの内容、あるいは博物館の雰囲気や市場が判断してのことであると考えている。一方、それが専門家の来館を躊躇させている一因なのかもしれない。

前項で今後の課題を述べたが、それが当館の特徴（個性）を削ぐものであってはならないと思う。「利用者のバランス」という言葉を使用した、バランスのとれた博物館が市場のニーズに受け入れられるかどうかは疑問が残るところであり、当館の特徴（個性）である「子どもに受け入れられる博物館」を伸ばしていくことが第一であると考えている。

今回は開館から4カ月間のデータでの報告となった。こういったものは継続して分析することに意味があると考えているので、今後も引き続き観察を行い、次回以降に報告を行いたい。

備 考

- ・第4図・第5図は3月分もデータに入れた。
- ・第8図の兵庫県立歴史博物館の入館者のデータは同館の館報（2003）を参考にした。
- ・1月2日と1月3日の入館者・観覧者は祝日に入れている。
- ・第14図の当館の10月分は1ヶ月分に補正した数字である。



写真2 博物館利用の風景